

寺島実郎著「世界を知る力」PHP新書、PHP研究所 2010年1月5日刊を読む

## 世界を知る力

### 1. agree to disagreeの関係

- (1) 「自分たちが有している歴史認識とは違うとらえ方が、他の国民・民族にはありうるということ、世の中にはさまざまなものの見方や考え方があるということを知ってほしい。賛成はできないけれども、あなたのものの見方、誠実に物事を組み立てて考えてみようという見方については大いに評価する、という姿勢が外交においても、国際社会を個人として生き抜く上でも大切だ」と。
- (2) こういう姿勢を、外交の世界では「agree to disagree」の関係と呼ぶ。
- (3) 歴史観を大きく異にする者同士の会話は、外交の世界でなくてもビジネスの世界でも日常的に起こりうる。たとえば、中国人と向き合って、南京虐殺問題や慰安婦問題に触れざるをえなくなることもあるだろう。あるいは、ロシア人と対していて、シベリア出兵の話や北方領土の話に及ぶこともあるだろう。
- (4) その時心を込めて、そこにいたった日本の歴史の流れを説明しながら、日本人としての誇りや自律・自尊の精神を失わずに日本の主張をきちんと伝えることがいかに難しいか、きっと痛感することだろう。
- (5) しかし、どれほど平行線であったとしても、自分たちの主張や自律・自尊の精神を失わずに、お追従で話すのでもなく、かつ単なるケンカ別れで終わるのでもない会話というのはいりうる。「賛成はできなくても、相手の主張の論点は理解した」という姿勢をもつことが肝要だ。中国の大学生たちも、話が「agree to disagree」に及ぶと、さすがにシーンとなって、最後まで聞いてみようという姿勢に変わるのである。
- (6) 外交の世界で、しばしば「未来志向の関係」ということがいわれる。しかし、互いに過去の歴史には目をつぶり、あいまいにするといった姿勢では、決して明るい未来は訪れないだろう。逆に、自分の言いたいことだけ一方的に言い放つというのでは、いつまで経っても関係すら築かれない。近隣諸国と「未来志向の関係」を築こうと考えるのであれば、自分たちの主張は主張として臆することなく伝えつつ、相手の論理、論点を虚心になって理解する姿勢が必要だ。
- (7) 「世界を知る力」は、自らを相対化し客観視する過程なくしては磨かれないのである。

P182 ~ 183

### 2. 不条理(な時代)と向き合って生きる気迫(知の本質)とは

- (1) 「知的活動を先へ進める、ある方角へ進めていく力は、知的能力じゃないと思うんです。それは感情的な、一種の直感と結びついた感情的なものだと思います。……ところが、その感情が、麻痺した、日本で。……いくら頭がよくても駄目なんで、目の前で子どもを殺されたら、怒る能力がなければなりません。あるいは何か一種の感情を生じないと駄目です。……情報を集めただけじゃどうにもならない」

(2) 「人間の尊厳を傷つけられれば怒る——それは精神の独立の証です。『一身独立して一国独立す』と福沢諭吉は言ったけれども、福沢諭吉の言っている一身独立とは、人間の尊厳を守ることです。だから場合によっては、犠牲を伴うかもしれないけれど、それでもそれを守ることがあって、その先には知的世界が展開するわけです。知的世界を展開させる原動力が弱まった。だから今は、知的な退廃がそれに伴って起こっているのだと思いますね」(加藤周一氏との対談から、「軍縮問題資料」2004年2月号。)

(3) わたしは、この加藤周一氏の言葉を聞きながら、「ああ、知の巨人の本質は、ここにあったんだな」と深く了解したものである。立派とかそういうことではない。時代に向き合って生きる気迫とはそういうことなんだ、とわかったのである。

(4) わたしたちは、「世界を知る」という言葉を耳にすると、とかく「教養を高めて世界を見渡す」といった理解に走りがちである。しかし、そのような態度で身につけた教養など何も役に立ちはない。世界を知れば知るほど、世界が不条理に満ちていることが見えてくるはずだ。その不条理に対する怒り、問題意識が、戦慄するがごとく胸に込み上げてくるようであれば、人間としての知とは呼べない。たんなる知識はコンピュータにでも詰め込んでおけばいい。

(5) 世界の不条理に目を向け、それを解説するのではなく、行動することで問題の解決にいたろうとする。そういう情念をもって世界に向き合うのでなければ、世界を知っても何の意味もないのである。

(6) 思えば幼時から私は周囲を知ろうとするよりも、自分自身のなかに閉じこもって暮してきた。その傾向は、戦時中にいよいよ強くなった。しかし戦後15年ばかりの間、私は、むしろ逆に、周囲に目を向け、いくらかの経験をし、多くの観察をした。しかし、そういう経験と、観察とは、私のなかで、それぞれ独立していて、その間の関係の必ずしもあきらかなものではなかった。その関係の少しずつ見えはじめてきたところで、はっきりとそれを見きわめ、経験と経験との間につながりをもとめ、個別的な観察を私の世界の全体のなかに組みこむ必要があるだろう。そういう欲求は、私のなかで次第に強くなろうとしていた(加藤周一著「羊の歌」岩波新書、岩波書店刊)

P196 ~ 199

### 3. マージナルマンという生き方

(1) 最後に、わたしの心のなかのメッセージであり続けた「マージナルマンという生き方」について触れておきたい。1973年、第一次石油危機の年、大学院の2年間を経て三井物産の新入社員として社会人としての生活をスタートさせて以来、わたしは「マージナルマン」という言葉を心に抱いてきた。

(2) マージナルマンとは境界人という意味で、複数の系の境界に立つ生き方という意味である。ひとつの足を帰属する企業・組織に置き、そこでの役割を心を込めて果たしつつ、一方で組織に埋没することなく、もうひとつの足を社会に置き、世界のあり方や社会のなかでの自分の役割を見つめるという生き方、それをマージナルマンという。

(3) サラリーマンとして帰属する組織に参画し、そこでの仕事に積極的に貢献し、評価を高める努力をすることは、きわめて重要である。たとえ生活の糧を得る手段にすぎないとしても、自らの所属する組織が抱える課題に真剣に取り組み、自分の職責を果たすことは意味のあることだと思う。わたし自身、三井物産という会社に所属し、多くの仲間と力を合わせて経営課題に挑戦でき

たことは、きわめて貴重な体験だった。

(4)ただ、仕事先の組織を唯一の世界と思い込み、「うちの会社」という意識に埋没し、家畜ならぬ社畜となって自らの存在すべてを譲り渡すことはするまいという意識を失うことはなかった。自分の時間を確保する努力をし、会社の外の研究会に参加したり、フィールドワークをする試みを続け、それを毎夜机に向かい整理して作品にしてきた。

(5)「忠誠心」という言葉において、企業は全人生を「会社に捧げる生き方」の人間しか評価しないと思われがちである。しかし、そんなことはない。片方の足をしっかりと社会に置き、所属組織を客観的に見る力をもった人間も必要としている。とりわけ、時代は右肩上がりの「終身雇用・年功序列の時代」を終え、帰属組織を失ったなら生きていけない虚弱なサラリーマンではなく、技能と専門性をもった汎用性の高い人間を必要としているのである。自らのテーマをもち、自らのライフスタイルを貫く意志をもちながら、帰属組織に腰を据えて参画する、これがマージナルマンの生き方なのである。

P202 ~ 204

#### [コメント]

米国のブルッキングズ研究所を経て米国勤務から帰国し、三井物産戦略研究所所長に就任直後中央会セミナーで寺島先生の4～5人の小さな研究会に毎月のように参加させて頂いていたので、本書も非常にわかりやすく感じられた。寺島先生の思いは、福沢諭吉の「独立自尊」に直結する。鳩山内閣直結の日本政治の中心概念になりつつある教え。わかりやすい文章なので、熟読し、自分のものにするをお勧めしたい。

— 2010年1月8日 林明夫記 —